二〇一四年一月三一日

春炬燵俳句談義に足が生え　こすもす

飛び翔ちし鴨また陣へ戻りけり　ともえ

大いなる雨の珠抱くいぬふぐり　宏　虎

水仙の香り愛でつつ活けにけり　よう子

幾橋を潜りて逸る雪解川　よし子

二〇一四年一月三〇日

老夫婦相寄り添ひて寒に耐ふ　三　刀

庭芝に仄と青さす春の雨　菜　々

踏青やチャペルの庭に青畝句碑　ぽんこ

たたなづく嶺々墨絵めく春の雨　はく子

二〇一四年一月二九日

一水の奏でそめたる森の春　満　天

浮寝鳥揺さぶりて過ぐ小舟かな　つくし

城堀の薄氷めがけ石礫　なつき

春を待つ遺影に語りかけもして　あさこ

二〇一四年一月二八日

浜どんど大漁旗をけぶらしむ　なつき

二〇一四年一月二七日

日向猫四肢を伸ばせり春隣　宏　虎

項垂れて心許なき冬の薔薇　菜　々

柄杓もて割る蹲踞の薄氷　よう子

老い吾に背を伸ばせとて大冬木　あさこ

二〇一四年一月二六日

日脚伸ぶ電波時計に狂ひなし　宏　虎

ピカピカに広縁磨き春を待つ　はく子

昇る陽に向ひて並ぶ寒雀　さつき

雲切れて紺碧の春見えにけり　菜　々

二〇一四年一月二五日

打ち響く太鼓に震ふ梅の花　三　刀

囀りに耳澄まし在す寿老神　ぽんこ

大枯木鎮守の杜を抽ん出し　さつき

一茎の侘助活けし茶の湯かな　よし子

干されたる漁網の匂ふ浜小春　治　男

酒蔵の試飲がめあて探梅行　菜　々

万歩計見せ合ひもして町小春　有　香

毎日句会みのる選・二〇一四年二月二日